

19世紀の地理学思想史に関するいくつかの見解

手塚 章

- | | |
|-------------------|------------------|
| I はじめに | IV シューファーとハーツホーン |
| II ヘットナーとリヒトホーフエン | V むすび |
| III レーリーとハーツホーン | |

I はじめに

個々の学者の地理学思想を地理学史の中でどう位置づけるか、あるいは、地理学思想の全体的な流れをどう捉えるか。これらの問いに対する回答は、いずれも論者の地理学観を不可避的に反映する。地理学の歴史、とりわけ19世紀以降の近代地理学の歴史は、異なった立場が共存し、地理学という枠組みの中で多様な学問的伝統が生き続けてきた歴史でもある。それゆえ、地理学をめぐる過去の多様な流れの中で、何を肯定的に評価し、何を否定的に評価するかは、地理学に対する論者の見方と深く結びついているのが普通である。これまで書かれた地理学思想史の多くにも、大なり小なり地理学に対する著者の主張が込められている。したがって、地理学思想史に関する個々の著作からは、地理学史にかかわる個々の事実とともに、それぞれの捉え方の背後にひそむ著者の価値判断の基準や、地理学のあるべき姿に対する著者の基本理念を読み取ることが重要である。

19世紀の地理学思想史をどう捉えるかという問題は、このような意味で非常に興味深い。なぜなら、19世紀こそ、学問分野としての地理学が確立した時期であり、科学としての地理学の性格づけが真剣に模索された最初の時期だからである。タムは、「今日みられるような科学的地理学 (scientific geography) は、19世紀の産物、より正確には、1750年頃から以降の150年間の産物である。この時期に (カントやフンボルト、リッター、ペシエル、ラッツェルらの) 偉大な体系家たちが地理学の学問領域と研究内容を明確にし、また研究材料の収集、組立て、提示の方法を編み出した」¹⁾と述べている。

19世紀の地理学史については、すでに世紀末の1898年にヘットナーが「19世紀における地理学の発達」という講演を行っている²⁾。また、19世紀のドイツ地理学で指導的役割を演じたリヒトホーフエンは、晩年の1903年に「19世紀における地理学発達の方向と原動力」と題する講演を行った³⁾。両者のテーマはほぼ同一であるが、19世紀の地理学発達史に対する二人の捉え方には、基本的な論調の違いが明らかに認められる。

観点の違いがより鮮明に見られるのは、地理学思想の歴史的評価をめぐって論争がたたかわされる場合である。地理学本質論としてわが国でも有名なハーツホーンの *The Nature of Geography* では、序論につづく第2章と第3章で、100ページ弱にわたって地理学思想の発達史が論じられている⁴⁾。ハーツホーン自身の言葉によれば、この部分を書き足された直接のきっかけは、「19世紀のドイツ地

地理学における方法論をめぐる論争」というレーリーの論文であった⁵⁾。ハーツホーンは、レーリー論文にみられる引用の誤りを指摘するとともに、主として19世紀のドイツ地理学思想史を、自己の地理学本質論とからみあわせて評価し、提示したのである。

地理学史と地理学本質論が相互に有機的な関係で結びついている状況は、シェーファーとハーツホーンの論争においても同様である。「新しい地理学」の発端⁶⁾として高く評価されているシェーファーの論文「地理学における例外主義——その方法論的吟味」⁷⁾にしても、従来の地理学をすべて否定しているわけではない。シェーファー論文の前半部分は、主としてカント以降の地理学思想史を論じたものであり、そこでの解釈が、後半部分における地理学研究の課題をめぐる考察と密接に結びついている。

このように、19世紀の地理学思想史をどのように捉えるかについては、今世紀を通じて長い論争の歴史と、基本的見解の対立がある⁸⁾。そして、この対立は、今日においても完全に解消されたわけではない。一部の地理学者は、科学哲学におけるパラダイム転換論や科学革命論を援用して、伝統地理学の破綻と「新しい地理学」の成立という単純な図式を提示する⁹⁾。このような観点に立てば、19世紀の地理学思想を論じることは単なる回顧趣味にすぎない。しかし、近年における地理学の潮流は、このような見方の妥当性に疑問を投げかけているように思われる¹⁰⁾。むしろ、従来以上にさまざまな立場が、それぞれ積極的に自己主張を繰り広げているのが、現在の地理学の状況であろう。重要なことは、このような立場の違いを認識することであり、その上で議論を深めていくことである。地理学史の記述は、論者の地理学観の表明という一面もっている。とりわけ、19世紀は学問分野としての地理学が成立した時期である。リッターの地理学をどのように評価するか、また、19世紀末に主張されたさまざまな地理学本質論をどう見るかという問題は、現代の地理学にとっても決して無縁ではない。

以下では、上であげた19世紀地理学思想史に関するいくつかの見解について、それぞれの基本的論点を、相互に対比しつつ検討することにした。このような作業を通じて、地理学の本質をめぐる基本理念の対立の図式が、その姿の一端を現してくるように思われる。

II ヘットナーとリヒトホーフェン

チュービンゲン大学での地理学教授就任演説としてなされたヘットナーの講演「19世紀における地理学の発達」は、明確な価値判断にもとづいて19世紀地理学の流れを概観しており、自己の地理学観をそのまま反映しているだけに、ヘットナーの地理学思想を理解するためには基本的な文献の一つである。ちなみに、マルトヌの『自然地理学概論』で、冒頭の第1章に述べられている「地理学の歴史」は、明らかにヘットナーの文章を重要な下敷きにしている¹¹⁾。また、飯塚浩二『人文地理学説史』の冒頭におさめられている「地理学発達史」¹²⁾が、マルトヌの文章を下敷きにしたものであることは序文中に明記されており、直接的にせよ、間接的にせよ、19世紀の地理学思想史に関するヘットナーの見解は、その後の研究者の地理学史に対する見方に大きな影響を与えてきたと言えよう。

地理学史に関するヘットナーの最も基本的な論点は、地理学の長い歴史を通じて、つねに一貫して流れる伝統的な地理学観の存在を強調したことである。地理学の一貫性の主張は、講演の冒頭と末尾

で二度にわたって繰り返されている。「地理学思想は、細かい点をみると多くの変遷があり、方法論者の見解もかなりの幅を示しているが、基本理念は時代を通じてつねに一貫していた。歴史学が、立場の多様さにもかかわらず、人にまつわる事象を時間の流れにおいて捉えるように、地理学はつねに地表にみられる空間的多様性を問題にしてきた。」¹³⁾「地理学は、時代とともに多くの変化を経験してきた。しかし、これらの変化は、一見して感じられる程には大きなものでなく、また気まぐれなものでもない。頭でっかちの方法論者による二三の恣意的な逸脱を別にすれば、地理学の固有な対象は古代から現代にいたるまでつねに同一であった。すなわち、地表の諸空間をその多様性にもとづいて認識することである。」¹⁴⁾シュルツは、ヘットナーの地理学思想の特徴の一部として、正統性・回帰・伝統の重視をあげているが¹⁵⁾、ヘットナーが「伝統地理学」の代表者とみなされてきたのも、この意味では理由のないことではない。

ヘットナーによれば、「地理学の固有の課題は、あらゆる時代を通じて、地表の諸空間の多様性を認識することであった。今日の地理学においても、同様にこの課題が追究されねばならない。そして、そのために、最近になって獲得された自然科学的な方法と知識が十分に活用されねばならない。」¹⁶⁾ヘットナーにとって地理学の進歩とは、伝統的な研究課題の追究が、時代の進展につれて新たに獲得された方法や知識を導入することによって、次第に深められることに他ならなかった。このような観点は、19世紀初頭における地理学の興隆や、その後のリッター学派に対する評価、さらには、19世紀末の地理学の多様な流れに対する価値判断に際しても、同様に適用されていると見ることができる。

リッターに対する評価は、ヘットナーの考え方をよく示している。リッターの地理学は、その掲げた目標において近代地理学を新たに確立したものであった。リッターによって、「無味乾燥であった従来の地理学は、科学としての性格をもつようになった。それまでの地理学が行政官や商人などの実用的な目的に直接役立つ知識を念頭に置いてきたのに対して、今や地理学はそれ自身を目的にして研究されるべき対象であった。従来の地理学がいわば応用地理学であったのに対して、純粹地理学（リッターの表現を借りれば「一般」地理学）が成立したのである。（中略）従来の地理学が記述の段階にとどまっていたのに対して、今や現象群の内的連関が追究されるようになり、「比較」地理学と呼ばれるようになった。（中略）しかし、枠組は同じままであった。数理地理学と一般自然地理学はリッターのいう地理学からは除外され、地理学の対象は従来どおり地表の空間的多様性にあるとされた。」¹⁷⁾

しかし、「リッターが実際に行ったことは、みずから掲げた目標に遠く及ばなかった。」¹⁸⁾ヘットナーは、リッター地理学のこうした限界を、リッターの性格と学問的背景にもとめた。ヘットナーによれば、リッターは科学的探検家でもなければ、野外での研究者でもなかった¹⁹⁾。リッターの名著『地理学（全19巻）』においても、「地域の自然の考察は主として海岸線の輪郭と大地の形態に限定され、また、それらの扱われ方も多くの場合は単なる記載にとどまり、現象の原因については当時すでに可能であった水準にすら遠く達しない考察しかなされなかった。巻が進むにつれて自然諸科学の進歩を反映して自然の考察が重みを増したかという点、事實はまったくその逆であった。」²⁰⁾「リッターは深く宗教的な性格をもち、世界のあらゆることに神の手を認めた。（中略）フンボルトの地理学的著作にみられるような自然研究者の因果論的考え方は、リッターにとって縁遠いものであった。

(中略) リッターの考察態度は自然哲学的であり、目的論的であった。(中略)しかし、この種の目的論的考察態度は科学的に不毛であり、科学の進歩に貢献する能力を欠いていた。』²¹⁾ 地理学研究の課題と方法の間にみられるこのような不均衡が、その後の地理学の順調な発展を妨げ、リッターの完全な影響下にあった19世紀中葉のドイツ地理学を深い沈滞に導いた、とヘットナーは論じている。

リッターに対する上述の評価は、学問分野としての地理学の位置づけとその独自性に関して活発な議論がかわされた19世紀末のドイツ地理学に対するヘットナーの価値判断に、そのまま反映している。「地理学の新しい流れは、(中略)一般地理学と並んですでに地誌学をとらえ始めている。そして、地誌学がふたたび地理学の中心核になりつつある。』²²⁾ 「近年の地理学の発展方向は、ある意味でリッターへの回帰として特徴づけられるかもしれない。しかし、それはリッターが掲げた理念それ自身への回帰であって、実際になされた(中略)一面的な考察への回帰では決してない。リッターが地理学の課題として提示したのは、個々の地域の総合的な、すなわち自然と人類を含む、あらゆる面で科学的な考察であり、多様な地域の比較であり、また、全地球的観点からのこれら多様性の説明であった。リッターはこの課題に対してきわめて不十分にしか応えることができず、また時としては、完全にこの課題を見失っていた。近代地理学は、この課題に対して新たに全面的に応えようとするものであり、現代のより豊富な道具立てを用いてこの課題に取り組むのである。』²³⁾

このように、19世紀の地理学思想史に関するヘットナーの見解においては、リッターに対する評価が、論の展開の一つの軸を形成している。ヘットナーは、一方で、リッター地理学の一面的な性格を厳しく批判しながらも、その基本的な理念については、伝統を踏まえた正統な地理学観として容認したのである。

これに対して、リヒトホーフェンの講演においては、地理学の発展が別の文脈で捉えられている。19世紀のドイツでは、地理学を意味する語として Geographie と Erdkunde の二つが用いられた。リッターの大著『地理学(全19巻)』は Erdkunde であり、この語が広く用いられるようになったのもリッターの影響力によるところが大きい。リッターにおいて Erdkunde は単に Geographie のドイツ語的な置き換えであったが、リヒトホーフェンは二つの語を多少異なった意味で用いている²⁴⁾。すなわち、Geographie の「固有の研究領域は地表(Erdoberfläche)である』²⁵⁾のに対して、「Erdkunde の対象は地球(Erde)である』²⁶⁾。それゆえ、リヒトホーフェンの講演では、地質学や気象学、さらには測地学、地球物理学などが、Erdkunde を構成する分野として Geographie とともに触れられている。19世紀の地理学史に対するリヒトホーフェンの見解がヘットナーの見解と異なることは、このような広い意味での Erdkunde の発達史のなかに地理学を位置づけた点に明らかに見てとることができる。

このことは、講演のなかで、リヒトホーフェンが終始一貫してフンボルトの重要性を強調したことと呼応している。フンボルトの研究は、まさに地理学の分野に限定されることなく、広く地球科学一般におよんだからである。「フンボルトの目標は、現象それ自身を観察するにとどまらず、彼自身が何度も述べているように、その因果的な連関を解明することにあった。そのためになされた研究努力の輝かしい成果を通じて、フンボルトは一般地球科学やその全ての構成分野に発展をもたらした。』²⁷⁾

「その後達成された巨大な進歩と、現在みられる専門分化にもかかわらず、19世紀末の地球科学は全体としてフンボルトが構想したものに、内容と方法の両面でほぼ対応している。」²⁸⁾「まとめて言えば、地球に関する諸科学の総体としての Erdkunde の広大な研究領域は、途中での紆余曲折はあったが、今やふたたび、相互的な因果関係にもとづいてフンボルトが構築しようとしたものに、そしてほぼ一つの体系にまとめあげたものに、基本的には結集しようとしている。他方で、研究材料の目ざましい増加と研究視点の多様性は、分業の必要性をますます高め、個別分野への専門分化の進展をもたらした」。²⁹⁾

地理学を地表の学として限定する一方で、同時に、地球科学としての Erdkunde の一員として位置づけるというリヒトホーフエンの地理学観は、先にみたヘットナーのそれと基本的な点で異なっていると言わねばならない³⁰⁾。このような展望のもとで、自然地理学（とくに地形学）が地球科学の中心的な部門とみなされ、19世紀における地理学発展の原動力として強調されたことは、いわば自然の成り行きであった。「あらゆる地球の諸科学が、自然地理学のなかに一つの結集の場をみいだす。自然地理学は、地表それ自身を研究の基本的対象にする学問分野であり、それゆえ、Erdkunde の他のどの分野よりも全ての方向に向かって開かれている」。³¹⁾人文地理学は、リヒトホーフエンにとって、その開かれた方向の一端として位置づけられた。「人類のよってたつ大地や、その生活する環境についての知識が、科学的な研究によって解明されることで、初めて、（中略）人文地理学の発達する基盤が確保できる。同じく科学的方法に向かって努力を傾けてきた人類学と民族学が、ここで地理学と出会うことになる。この接触を通じてもたらされた魅力的な研究の諸課題は、すでに多くの前途有望な取組みを生み出している。とりわけ集落や交通、生産、交易などの現象を、地理学で研究される自然的諸条件と結びつけて考察することは、近年急速に発展しつつある経済学の一部との連係を通じて、実り豊かな研究視点を提供している」。³²⁾

19世紀の地理学史に関するリヒトホーフエンの見解が、フンボルトの意義を強調するようなかたちで組み立てられているからとあって、リッターの役割が無視されているわけではない。地理学方法論に言及した最初の著作このかた、リヒトホーフエンはリッターをきわめて高く評価してきた³³⁾。講演のなかでリヒトホーフエンは、地誌学の動向を概観した部分でリッターにふれている。「19世紀の初頭においても、地誌学は表面的な特徴によって整理された寄木細工にとどまっていた。カール・リッターは、彼のライフワークのなかで、地誌学を二つの点で百科事典的な観点を越える高みにまで向上させた。第一は、資料の徹底的な収集と利用、細心なまでの資料の明示、慎重な資料批判といった方法的側面であり、第二は、大地と人類の因果的な関係をつねに考慮し、哲学的な考察を加えるという内容的な側面であった」。³⁴⁾

しかし、ヘットナーが述べた意味でのリッター的理念が、19世紀の地理学にとって発展の主方向であったとは、彼は考えなかった。限定された地域空間の中身を、全体として科学的に考察することは、リヒトホーフエンの時代においても実現不可能な目標であった³⁵⁾。地誌学と一般地理学の関係について、リヒトホーフエンは別の著作のなかで、前者の科学的進歩は後者の発達に依存しており、両者を比較すれば、一般地理学の方がより高位をしめ、より包括的である、と明言している³⁶⁾。このよ

うな見方は、19世紀の地理学史に関するリヒトホーフエンの見解にも明らかに反映していると言わねばならない。

Ⅲ レーリーとハーツホーン

レーリーとハーツホーンの論争は、地理学本質論の古典的著作である *The Nature of Geography* を生み出したという点で、きわめて実り豊かなものであった。この名高い著作の成立過程については、ハーツホーン自身の手になる回顧録がある³⁷⁾。ハーツホーンによれば、方法論に関する論文に着手する直接のきっかけは、1937年のアメリカ地理学会における二つの出来事であり、いずれも地理学観の相違にもとづく意見の対立であった。地理学史に関する部分は、すでに述べたように、レーリーの論文「19世紀のドイツ地理学における方法論をめぐる論争」に触発されて、最終段階で書き足されたものである。このように、地理学本質論から、やがて地理学史の評価に議論が飛び火したという点で、ハーツホーンの著作は両者の密接な結びつきをよく示している。

19世紀の地理学思想史に関するレーリーとハーツホーンの見解は、リッターとフンボルトをどう位置づけるかという点で、基本的に対立している。レーリーによれば、相互にまったく異なる二つの地理学理念（リッターの地理学理念とフンボルトの地理学理念）の対立が、19世紀以降の地理学史を規定している。「きわめて対照的なフンボルトとリッターの構想が、同じ時期に主張され、どちらも地理学という名称を用いたのであるから、両者が対立するにいたるのは不可避であった。（中略）以下に言及される論争は、どれもフンボルトの地理学観とリッターの地理学観の不可避的な対立を受け継いだものとして解釈することができる。それぞれの見解の擁護者がたとえフンボルトとリッターを引き合いに出さなくとも、この長年にわたる対立の連続性は明らかである。」³⁸⁾

レーリーによれば、フンボルトの構想した地理学は、科学的探検を通じて蓄積された観察事実にもとづく世界の自然地理学であり、ワレニウスやカントの系譜につらなるものであった。これに対し、リッターの地理学は、自然神学と結びついて独特な目的論的色彩を帯びてはいるが、基本的には昔ながらの伝統的な記載地理学を引き継いだものとして解釈された。すなわち、ハーツホーンの影響を借りれば、「19世紀におけるドイツ地理学思想の歴史を、レーリーは、自然科学として真に科学的な地理学をめざす一派と、伝統的な見解にくみする一派の絶えざる対立」³⁹⁾とみなしたのである。レーリー論文の主たる目的は、後者に対する前者の批判をあとづけることであった。

レーリーは、19世紀のドイツで主流を形成したのはリッター地理学であると指摘し、これに対するフンボルト的理念からの反撃の試みとして、1830年代におけるフレーベルの議論と1887年に発表されたゲルラントの地理学論を紹介している。両者のうち、フレーベルの議論がリッター地理学の直接的な批判であるのに対して、ゲルラントのそれは、リッター地理学を直接攻撃したものではない。しかし、両者の論点に、レーリーは基本的に共通の性格を認めている。

フレーベルとゲルラントの議論を細部にわたって検討することは、本稿の課題を越えている。ここでは、レーリーが両者の主張の核心を、それぞれ次のように捉えたことを指摘するにとどめたい。「フレーベルは、自然科学が急速に発展しつつあった同時代の精神を反映して、次のように結論づけ

ている。「地理学が何らかの意味のある科学的成果を獲得できるとしたら、それは、地形や河川、大気や気象現象、植生、動物、人類（集落や国家）などを、地理学が個別に研究するときである。」⁴⁰⁾「ゲルラントは、地理学について、空間を充填する地上の対象物に関する科学であるとする、長らく通用してきた空虚な定義を葬り去った。「空間を占める異質な対象物群に関する知識は確かに存在しよう。しかし、その異質性のゆえに、それらに関する科学は不可能である。」⁴¹⁾フレーベルにせよ、ゲルラントにせよ、地理学の伝統にまどわされることなく、自然科学の厳密な論理にしたがって彼らの論理を展開した。彼らにとって、地理学は純粋に自然科学であった。両者に共通してみられる主張は、地域に関する総合科学としての地理学、すなわち地誌学に対する明確な拒絶であったと言える。レーリーは、このような主張をフンボルトの地理学観を受け継いだものとして、リッター地理学の流れに対置したのである。

19世紀の地理学思想史に対するレーリーのこのような捉え方に対して、ハーツホーンはほぼ全面的に反論している。ハーツホーンの批判は、主としてリッターとフンボルトの地理学思想に対するレーリーの解釈に向けられた。リッターの地理学思想を詳細に検討した部分で、ハーツホーンは、「リッターとフンボルトの性格の違いや、そのために生じた研究面での相違を考えると、そして特に、両者の地理学観の間に想定されている対立関係のゆえに、（リッター地理学に対する）フンボルトの見解を詳しく検討」⁴²⁾している。その結果、フンボルトがリッターの研究に対して称賛をおしかなかったこと、そして、その称賛がリッター地理学の内容と方法の両面にわたるものであることを、ハーツホーンは指摘した。「これらの点のすべてについて、リッターとフンボルトの間には、地理学観の上で、本質的な違いはなかった。」⁴³⁾たしかに「気質や人生観の大きな違いは、近代地理学の建設者であるこの二人の業績にきわめて異なった色彩を与えている。そして、彼らの後継者たちの研究活動において、この違いは基本的なものにまで拡大した。したがって、後世の研究者が二人の差異を強調し、さらには（中略）対立さえ見いだそうとすることも、無理のないことと言える。このような対照（コントラスト）は、興味深くもあり印象的でもあるが、表面的でしかない相違を基本的な違いであるかのように誇張することは、歴史的な客観性からいって許されないことである。」⁴⁴⁾

ハーツホーンの批判の鋒先は、同時に、リッターの地理学観に対するレーリーの「誤った理解」にも向けられた。そこでの論点は、「単に歴史的な発展についての見解の相違ではなかった。それが、過去の著作に書かれていることに対する誤解に基づいているのであれば、そのことを証明する」⁴⁵⁾必要があった。リッター地理学の根本にかかわる誤解として、ハーツホーンは、先にゲルラントの地理学論に関連して引用された「空間を充填する地上の対象物に関する科学」としての地理学というレーリーの表現を槍玉にあげている。ハーツホーンによれば、これは「地的に充填された諸空間の科学」というドイツ語を誤訳したものである。「たしかに、レーリーは、この言葉を直接リッターと結びつけてはいない。ゲルラントの主張を検討した文中で“長らく通用してきた空虚な定義”として述べただけである。（レーリーの論文には）参照ページが明示されていないが、ゲルラントの論文を検討すると、（中略）ゲルラント自身は、リッターの言葉を正しく引用していたことがわかる⁴⁶⁾。もつとも、ゲルラントは出典に言及していない。おそらく、それがリッターのもっとも有名な言葉の一つである

ことは、どの読者も知っていると考えたのであろう。他方、公平をきすために付け加えると、ゲルラントも、この（レーリーの）誤解に対して責任の一部をおっている。なぜなら、ゲルラントがリッターの地理学理念を“葬り去った”とき、それはレーリーの翻訳が示しているような誤解に基づいていたからである。すなわち、レーリーの翻訳は、リッターが意味しようとしたものについての、ゲルラントの誤解を正しく反映している。⁴⁷⁾

ハーツホーンがリッターの地理学理念を要約して、「地理学においては、地表に存在する対象物がそれ自体として考察されることはない。そうではなくて、地域をみたます諸現象が相互に関連し、また大地と関連することで生じる地域の特性という観点から、地表の諸地域が考察されるのである」⁴⁸⁾と述べたとき、それは、ハーツホーンにとって、近代地理学の歴史でつねに主流を形成した基本理念に他ならなかった。レーリーが主張しているように、単に地域別に並べられた百科事典的な便覧ではなく、18世紀このかた、カントやフンボルトやリッターによって確立された新しい独立科学の枠組みであった⁴⁹⁾。このような展望のもとで、フレーベルやゲルラントの論は、歴史的発展の主流から逸脱した偏向として位置づけられた⁵⁰⁾。ハーツホーンの見方は、19世紀の地理学史に関するヘットナーの見解と明らかに共通している。ちなみに、前節で検討した「19世紀における地理学の発達」のなかで、ヘットナーは、フレーベルについて本文では触れずに、脚注で「フレーベル氏の方法論的見解を無視したのは、単にそれが何の影響力も及ぼさなかったからである」と述べている⁵¹⁾。また、ゲルラントの論についてヘットナーは、「純粹自然科学としての地理学、さらには地球に関する物理科学としての地理学、もしくは地理学の中核に地球物理学を据えるような考え方は問題にならない。（中略）このような方向は、歴史的な発展が示している地理学の役割をまったく念頭に置いていない」と指摘している⁵²⁾。

IV シューファーとハーツホーン

最後にとりあげるのは、1953年に発表されたシューファー論文と、これに対するハーツホーンの見解である。よく知られているように、シューファー論文の直接のねらいは、当時のアメリカで最も有力だったハーツホーンの見解を批判することであった。したがって、地理学思想史の考察は論文の直接のテーマではなく、また、19世紀の地理学史に対するシューファーの見解も整理された形で述べられているわけではない。しかし、すでに述べたように、論文の前半部分でかなりのスペースが地理学史の考察にさかれており、ここでもまた、地理学本質論と地理学史の密接な関係が示されている。

シューファーの議論は、ハーツホーンの見解が例外主義 (exceptionalism) の立場によっていること、および、このような例外主義の立場が非科学的であること、の2点から出発している。それゆえ、地理学思想史に関するシューファーの考察は、主として、地理学における例外主義の系譜をたどり、これを批判することに向けられた。例外主義とは、地理学を「他のすべての科学とまったく異なり、方法論的にユニークな」⁵³⁾ 科学とみなす立場に対して、シューファーがつけた名称である。シューファーによれば、地理学は、経済学や社会学とまったく同じ構造を有している。地理学に系統

地理学と地誌学の別があるのは、経済学（社会学）において、経済（社会）現象を系統的に考察する場合と、特定の経済団体（社会集団）を考察する場合があるのと同様である⁵⁴。したがって、系統地理学と地誌学の二元論を言い立てて、その相対的重要性を論じることなどは無意味である⁵⁵。物理学との比較でいえば、系統地理学はいわば理論物理学にあたり、「地誌学は、理論物理学者がなした一般的な言明の真偽を検証する実験室のようなものである」⁵⁶とシェーファーは主張した。

例外主義の系譜をシェーファーは、カント、リッター、ヘットナー、ハーツホーンとたどっている。これに対して、この系譜に属さない研究者として、フンボルトとクラフト⁵⁷があげられている。カントによれば、「経験的知覚は、概念にしたがって整理するか、もしくは、それが実際にみられる時間と空間にしたがって整理することができる。（中略）後者によって自然の地理学的記述がえられる。（中略）歴史学と地理学の両者は、いわば記述と呼ぶことができよう。前者は時間にしたがっての記述であり、後者は空間にしたがっての記述である。（中略）歴史学は時間的に継起する諸事象の報告であり、地理学は空間的に並起する諸事象の報告である。」⁵⁸このような例外主義の立場に対して、シェーファーは、概念にしたがって整理する系統的学問と、時間／空間にしたがって整理する歴史学／地理学を区別することは誤りであると論じ、また、地理学の内容を狭い意味での記述に限定するカントの見方に反対を唱えた⁵⁹。

シェーファーによれば、科学的な地理学の流れはフンボルト（さらにはリッター）の地理学観に見いだすことができる。フンボルトとリッターにとって、「地理学は、少なくとも潜在的に、法則の発見に努める科学」⁶⁰であった。どちらも、系統地理学と地誌学の対立といった「見かけ上の問題にかかずらうことはなかった。系統地理学は法則の定式化に努め、そこで定式化された法則が地誌学に適用されるということを、彼らははっきり理解していた。フンボルトは、法則の定式化と検証こそが科学者の目指しうる最高の目標であると感じていた。」⁶¹リッターが地誌学を主要な関心事とし、それを純粹に記述の段階にとどめたのは、系統的な知識が存在しないという時代の制約のためであった。「リッターは、自分のこの選択を飾りたてはしなかったし、現実上の制約を方法論上の原則にすりかえることもしなかった。」⁶²シェーファーによれば、フンボルトの地理学観に例外主義の立場を見いだすのは、彼のコスモロジーに関する議論を地理学方法論と混同した結果である。「フンボルトは、コスモロジーがそれ自身の正当な位置づけをもっていると考えてはいたが、地理科学として彼が明確に認識しているものとコスモロジーとを混同することはなかった。」⁶³

カントの権威を利用して、地理学に例外主義の立場を押し付けたのは、シェーファーによればヘットナーである。カントが地理学と名づけ、フンボルトがコスモロジーと名づけたものの原理が、ヘットナーによって近代地理学に押し付けられた。「このようにして、（中略）一連の非科学的な理念が、地理学に侵入する道が開かれたのである。すなわち、唯一性（ユニークネス）にもとづく典型的にロマン主義的な議論；諸変量は相互に関連しあって反分析的な全体を形成するはずだ、という論証不能な事実の实在視；これと関連して、地理学特有の統合的役割に関する見せかけの主張；そして最後に、科学的方法の冷静な客観性をさしおいての、研究者の直感と芸術的感覚への訴えかけ、などである。」⁶⁴シェーファーが批判しようとしたのは、ヘットナーからハーツホーンへと受け継がれた地理学

理論の、このように非科学的な性格であった。

シェーファーの批判に対するハーツホーンの反論は、数回にわたって行われた。このうち、1955年に発表された「“地理学における例外主義”の検討」⁶⁵⁾は、シェーファー論文における事実誤認と解釈の誤りを詳細に検討したもので、また、1959年に刊行された *Perspective of the Nature of Geography*⁶⁶⁾ は、地理学の本質に関するハーツホーンの見解をあらためて提示したものである。これらの他に、1958年には「カント、フンボルトからヘットナーにいたる空間科学としての地理学概念」⁶⁷⁾ という論文があり、地理学思想史に関するハーツホーンの見解が整理された形で示されていて、これもシェーファーに対する反論の一環と考えることができる。

地理学史の評価に関して言えば、カント／ヘットナーの例外主義とフンボルト／リッターの科学的地理学観を対置したシェーファーの見解が、基本的な事実誤認として批判の対象になった。フンボルトとリッターの地理学観としてシェーファーが指摘した3点、すなわち「地理学は、少なくとも潜在的に、法則の発見に努める科学であること；それは地表に限定されていること；また、それは本質的にコロロジ的 (chorological) であること」⁶⁸⁾ は、この記述のもととなったクラフトの論文によれば、主としてヘットナーの地理学観を要約したものである、とハーツホーンは指摘した⁶⁹⁾。この部分を、もしそのように書き変えたならば、シェーファーの主張の大半が成立しなくなるだろう、とハーツホーンは付け加えている。

コスモロジーの方法論と地理学の方法論がフンボルトにおいて明確に区別されていたというシェーファーの主張も、事実誤認として退けられた。Kosmos や「他の数多くの著作でなされた地理学に関するフンボルトの言明は、(中略)生涯を通じて彼の地理学観がつねに一貫していたこと、コスモロジーと系統地理学の違いは、前者が全宇宙をあつかうのに対して後者が地球をあつかうという点だけであることを示している。」⁷⁰⁾ それゆえ、フンボルトにとって地理学は法則を追究する科学であり、コスモロジーは記述的なものであるというシェーファーの主張は成り立たない。

このように、シェーファーによって例外主義と名づけられた地理学観は、ハーツホーンによれば、「カント、フンボルトからヘットナーにいたる空間科学としての地理学概念」に他ならず、これこそが、地理学という学問分野の特徴を適切に捉えた地理学観なのである。「地理学に固有の諸特徴は、世界における諸現象間の結びつきを、地域的相互関係のかたちで捉えようとする人間努力の産物である。したがって、これらの諸特徴は、地理学に関するいかなる理念からも独立している。むしろ、これらの特徴を経験的な事実として、それに立脚して地理学理念を構築すべきである。(中略)カントとフンボルトが述べ、ヘットナーがより詳しく説明した地理学理念は、地理学分野に関するこれらの経験的な事実、一つの妥当な説明を提供している。それゆえ、この地理学理念を特定の誰かや少数の学者が発明したものと考えるのではなく、むしろヘットナーが言うように、研究の共通の枠組みをもとめた無数の地理学者たちが大なり小なり自覚していた認識として理解すべきであろう。」⁷¹⁾

V む す び

諸科学の分業体制のなかで地理学をどのように位置づけるか、また、科学としての地理学の本質を

どのように性格づけるかという問題に対しては、地理学という学問分野が制度的に確立し、専門家としての地理学者集団がドイツやフランスをはじめ欧米の各国に形成された19世紀末このかた、さまざまな見解が主張され、対立と論争を繰り返してきた。地理学史が、大なり小なり、自己の見解を歴史的にあとづけ、過去の地理学者の見解を選択的に整理することで、地理学発展の「正しい道」を指し示そうとするものである以上、そこに見解の相違と対立が生じることは自然であった。本稿でとりあげた5人の地理学者の地理学史は、いずれも学説史のこのような性格を如実に反映していたと言える。

かつてパティソンは「地理学における四つの伝統」という論文で、地球科学としての地理学、環境論としての地理学、地域研究としての地理学、空間分析としての地理学という4種類の地理学観の系譜を論じた⁷²⁾。本稿で考察した5人の地理学者を、もしパティソンの分類にあてはめて考えるならば、リヒトホーフエンとレーリーの地理学史は、まさに「地球科学としての地理学」の立場によっている。これに対して、ヘットナーとハーツホーンは「地域研究としての地理学」の立場を代表し、シェーファーは「空間分析としての地理学」という観点に立脚していると言ってもよいであろう。

しかし、ヘットナー対リヒトホーフエン、レーリー対ハーツホーン、シェーファー対ハーツホーンという形で、地理学史の捉え方に関するコントラストを比較してみると、そこには地理学の本質について二つの基本的に異なった立場が表れているように思われてならない。3組の対比を通じて、中心的な論点は、いずれの場合もコロロジ的な視点(地域的な立場)を地理学の基本理念とするかどうか、ということではなかったろうか。地理学を「地的に充填された諸空間の科学」と定義づけたリッターの評価が、どの場合も意見の大きな分かれ目であったことは象徴的である。フンボルトとリッターが強調した地域的総合の理念や、地域的なものの見方の重視を、19世紀における地理学発展の本流として位置づけるかどうかの評価の分かれる点であったと言ってもよからう。

そして、このような基本的立場の違いは、現在の地理学にとっても依然として本質的な論点であるように思われる。例えば、人間集団の地理学的考察において、パンジュメルは発想の異なる二つのアプローチが存在すると指摘している⁷³⁾。すなわち、人間集団それ自身を研究対象として、その数量的側面を分析したり(人口地理学)、社会的属性を検討したり(社会地理学)、さまざまな行動を考察すること(食の地理学や選挙地理学など)が、人文地理学固有の課題であるとする立場が一方に存在する。これに対して、もう一方の立場では、人間社会が場所との関係で捉えられ、人間の活動が地表にもたらした帰結が考察される。もちろん、どちらの場合も、人口の分布とその属性が研究の出発点である。その点で、二つの立場はたがいに似通っている。しかし、その目指すところは異なっている。前者の場合、研究の対象はあくまでも人間集団である。後者では、地域なり場所なりに主要な関心があり、人間集団は地域の造形者として、あるいは場所の性格を示す指標として捉えられることになる。「地理学は場所の科学であって、人間の科学ではない」と述べたのは、フランス近代地理学の父ヴィダル・ドゥ・ラブラシュだが⁷⁴⁾、その後の地理学の推移は、この問題をめぐる論争が現在にいたるまで解決されていないことを示している。

注・参考文献

- 1) Tatham, G. (1951) : Geography in the nineteenth century. in Taylor, G. [ed]: *Geography in the twentieth century*. New York/London, p. 28.
- 2) Hettner, A. (1898) : Die Entwicklung der Geographie im 19. Jahrhundert. *Geographische Zeitschrift*, 4, 305~320.
- 3) Richthofen, F. F. von (1903) : Triebkräfte und Richtungen der Erdkunde im neunzehnten Jahrhundert. *Zeitschrift der Gesellschaft für Erdkunde zu Berlin*, 38, 655~692.
- 4) Hartshorne, R. (1939) : *The nature of geography*. Lancaster, 35~129. (野村正七訳『地理学方法論』, 1957年, 朝倉書店, 21~134)
- 5) Hartshorne, R. (1979) : Notes toward a bibliography of The nature of geography. *Ann. Ass. Am. Geogr.*, 69, 72~73.
- Leigly, J. (1938) : Methodologic controversy in nineteenth century German geography. *Ann. Ass. Am. Geogr.*, 28, 238~258.
- 6) 野間三郎訳編『空間の理論』, 1976年, 古今書院, 11~13.
- 7) Schaefer, F. K. (1953) : Exceptionalism in geography : a methodological examination. *Ann. Ass. Am. Geogr.*, 43, 226~249. (訳は前掲 6), 14~47に所収)
- 8) 戦後に限っても, 次のようなものがある。
野間三郎『近代地理学の潮流』, 1963年, 大明堂。
Tatham, G. (1951) : 前掲 1), 28~69。
Beck, H. (1957) : Geographie und Reisen im 19. Jahrhundert. *Petermanns Geographische Mitteilungen*, 101, 1~14。
Schultz, H. -D. (1980) : *Die deutschsprachige Geographie von 1800 bis 1970*. Berlin。
Claval, P. (1984) : *Géographie humaine et économique contemporaine*. Paris, 17~38.
- 9) 坂本英夫・浜谷正人編著『最近の地理学』, 1985年, 大明堂, 1~3.
- 10) この点については,
手塚 章 (1988) : 地理学の革新と伝統. 中村和郎・高橋伸夫編『地理学への招待』, 古今書院, 168~191.
- 11) Martonne, E. de (1929) : *Traité de géographie physique*. (第4版) Paris, 3~26.
- 12) 飯塚浩二『人文地理学説史』, 日本評論社, 1~30.
- 13) 前掲 2), p. 306.
- 14) 前掲 2), 319~320.
- 15) Schultz, H. -D. (1980) : 前掲 8), p. 184.
- 16) 前掲 2), p. 316.
- 17) 前掲 2), p. 310.
- 18) 前掲 2), p. 310.
- 19) 前掲 2), p. 309.
- 20) 前掲 2), 310~311.
- 21) 前掲 2), p. 311.
- 22) 前掲 2), p. 316.
- 23) 前掲 2), p. 317.
- 24) Geographie と Erdkunde が異なることについては, リヒトホーフエン自身が明確にのべている。
Richthofen, F. F. von (1883) : *Aufgaben und Methoden der heutigen Geographie*. Leipzig, p. 25. (国松久弥訳『現代地理学の課題と方法』, 1976年, 古今書院, 20~21)
なお, リッターの用語法については, ワグナーが次のような注釈を加えている。「もともとリッターは, Erdkunde という言葉を, 現象間の関係を認識するさいに, 単なる Erdbeschreibung よりも高次の段階として, かつ Erdwissenschaft の前段階として用いようとした。」
Wagner, H (1912) : *Lehrbuch der Geographie*. (第9版) Leipzig, p. 27.
- 25) 前掲 24), p. 7. (訳書 p. 7. ただし, ここでの訳は筆者による. 以下も同様.)
- 26) 前掲 3), p. 657.
- 27) 前掲 3), p. 673.
- 28) 前掲 3), p. 674.
- 29) 前掲 3). p. 689.
- 30) リヒトホーフエンの地理学観については, さまざまな側面があり, それゆえ多様な解釈がありうる. この点についての考察は今後の課題にしたい.
- 31) 前掲 3), p. 689.
- 32) 前掲 3), p. 688.
- 33) Richthofen, F. F. von (1877) : *China*. (第1巻) Berlin, 731~732.
p. 731 には次のようなくだりがある, 「(地理学に

- 立脚した) これらの応用諸部門が取り扱ってきた諸現象の総体を, リッターが行ったように, 地表の諸形態や諸特性との因果関係において考察するようになったとき, すなわち, 地理学的方法が用いられたときに初めて, リッター的な意味での“比較地理学”は他の諸科学と異なる一つの(独立)科学としての地位を確保できたのであり, 地理学それ自身の統合的な領域を形成することができたのである。」
- 34) 前掲 3), p. 677.
- 35) 前掲 3), p. 678.
- 36) 前掲 24), p. 38. (訳書 p. 29)
- 37) 前掲 5), 63~76.
わが国では立岡が, ハーツホーンの回顧録に基づいてこの間の事情に触れている。
立岡裕士 (1985) : 現代地理学史の分析枠の構築にむけて. 人文地理, 37, 193~214.
- 38) Leighly, J. (1938) : 前掲 5), p. 243
- 39) Hartshorne, R. (1979) : 前掲 5), p. 72.
- 40) Leighly, J. (1938) : 前掲 5), p. 244.
- 41) Leighly, J. (1938) : 前掲 5), p. 251.
- 42) 前掲 4), p. 53. (訳書 p. 43. ただし, ここでの訳は筆者による. 以下も同様.)
- 43) 前掲 4), p. 58. (訳書 p. 48)
- 44) 前掲 4), p. 58. (訳書 48~49)
- 45) Hartshorne, R. (1979) : 前掲 5), p. 73.
- 46) Gerland, G. (1887) : Vorwort des Herausgebers. *Beiträge zur Geophysik*, 1, p. XVI.
- 47) 前掲 4), p. 57. (訳書 47~48)
- 48) 前掲 4), p. 57. (訳書 47~48)
- 49) 前掲 4), 134~144. (訳書 140~152)
- 50) 前掲 4), 102~120. (訳書 101~122)
- 51) 前掲 2), p. 305.
- 52) 前掲 2), 315~316.
- 53) 前掲 7), p. 231. (訳書 p. 22. ただし, ここでの訳は筆者による. 以下も同様.)
- 54) 前掲 7), p. 231 (訳書 p. 21)
- 55) 前掲 7), p. 230 (訳書 19~20)
- 56) 前掲 7), p. 230 (訳書 p. 20)
- 57) シェーファーは, クラフトの地理学論を明晰にして簡潔と称賛したが, 幸いにして, われわれはこれを日本語で読むことができる。
Kraft, V. (1929) : Die Geographie als Wissenschaft. in Kende, O. [ed] : *Enzyklopädie der Erdkunde*. Leipzig/Wien. 1~22.
- 松井武敏 (1934) : 地理学方法論——クラフトのそれに就いて. 地理論叢, 3, 324~350.
- シェーファーは, クラフトの地理学理論をフンボルト的伝統の継承として, ヘットナー/ハーツホーンのそれと対置した. これに対してハーツホーンは, クラフトの地理学理論について, むしろヘットナーの見解に近いと述べている。
Schaefer, F. K. (1953) : 前掲 7), p. 227.
- Hartshorne, R. (1955) : “Exceptionalism in geography” re-examined. *Ann. Ass. Am. Geogr.*, 45, p. 211.
- 58) 前掲 7), 232~233. (訳書 p. 23)
なお, これはカント『自然地理学』序論からの引用である。(カント全集第15巻『自然地理学』. 1966年, 理想社, 39~52参照)
- 59) 前掲 7), p. 233. (訳書 p. 24)
ちなみに, ハーツホーンは, シェーファー自身の地理学観も例外主義の立場によっていると指摘している。
「地理学は, もろもろの現象それ自身というよりも, 地域でのそれら現象の空間的配列に注目せねばならない。(中略)空間的諸関係こそが, 他のどの分野でもなく地理学で重要な意味をもつ. 地域での諸現象間の非空間的諸関係は, (中略)他分野の専門家があつかう問題である。」(Schaefer, F. K. (1953) : 前掲 7), p. 228 ; 訳書 p. 16)
- シェーファーはここで, 「気づくことなく, 諸科学のなかにおける地理学の地位を, 独特な, すなわち例外的なものとして描いている。(中略)他の科学が特定の種類の現象を, その非空間的諸関係について研究するのに対して, 地理学はあらゆる種類の現象の空間的諸関係を研究する」からである。(Hartshorne, R. (1955) : 前掲 57), p. 214)
- また, カントの地理学が狭い意味での記述であるというシェーファーの批判に対しても, ハーツホーンは, カント『自然地理学』の第一部を一読すれば, このような判断が誤りであることは明らかだろう, としている. さらにハーツホーンは, 「カントと同様の観点を主張した後世の学者で, このような科学分類のもとで地理学が“単なる記述”に限定されると述べたものは一人として存在しない」と付け加えている。(Hartshorne, R. (1955) : 前掲 57), p. 221)
- 60) 前掲 7), p. 228. (訳書 p. 17)

- 61) 前掲 7), p. 230. (訳書 19~20)
 62) 前掲 7), p. 230. (訳書 p. 20)
 63) 前掲 7), p. 235. (訳書 26~27)
 64) 前掲 7), p. 235. (訳書 p. 27)
 65) Hartshorne, R. (1955) : 前掲 57), 205~244.
 66) Hartshorne, R. (1959) : *Perspective on the nature of geography*. Chicago. (山岡政喜訳『地理学の本質』. 1975年, 古今書院)
 67) Hartshorne, R. (1958) : The concept of geography as a science of space, from Kant and Humboldt to Hettner. *Ann. Ass. Am. Geogr.*, 48, 97~108.
 68) 前掲 7), p. 228. (訳書 p. 17)
 69) Hartshorne, R. (1955) : 前掲 57), p. 213.
 70) Hartshorne, R. (1955) : 前掲 57), 222~223.
 71) 前掲 67), p. 108.
 72) Pattison, W. D. (1964) : The four traditions of geography. *Journal of Geography*, 63, 211~216.
 73) Pinchemel, Ph. and Pinchemel, G. (1988) : *La face de la terre*. Paris, 39~40.
 74) Vidal de la Blache, P. (1913) : Des caractères distinctifs de la géographie. *Annales de Géographie*, 22, p. 299.

Several Points of View Concerning the Evolution of Geographical Thought in the 19th Century

Akira TEZUKA

In the history of geography, particularly in the history of modern geography, there has always existed plural streams of thought, conflicting and cohabiting under the same name of geography. It is therefore natural that one's opinion upon the evolution of geographical thought is closely combined with his view on the nature of geography. In this sense, it is a very interesting question how can be understood the evolution of geographical thought in the 19th century. For it was in that period that geography was firmly established as an academic discipline and, for the first time, discussions on the nature of geography were eagerly carried on.

Shortly before and after the turn of the century, two famous geographers, A. Hettner and F. F. von Richthofen, made addresses on the history of geography in the 19th century. Although the themes of their speeches were almost the same, one can easily recognize the fundamental difference of their perspectives. In the case of controversy, the contrast of opinions becomes much more marked. In *The Nature of Geography*, R. Hartshorne presented his view on the history of modern geography over one hundred pages, which were added, according to himself, in the last stage of writing as a counterargument against the article entitled "Methodologic controversy in nineteenth century German geography" of J. Leighly. In the polemic article of F. K. Schaefer about "exceptionalism in geography", the interpretation of the history of modern geography was an important element of his argument. Again, Hartshorne indicated interpretative errors of the article and restated his interpretation on the main stream of modern geography.

On the history of modern geography, W. D. Pattison pointed out four different traditions (earth science traditions, area studies tradition, man-land tradition and spatial tradition). According to this classification, one can say that the opinions of Richthofen and Leighly were based upon earth science tradition and those of Hettner and Hartshorne represented area studies tradition and, finally, that of Schaefer was in accordance with spatial tradition.

But, in all these pairs of opposing opinions (Hettner *vs.* Richthofen, Leighly *vs.* Hartshorne and Schaefer *vs.* Hartshorne), there seems to have existed a more fundamental difference, which was closely combined with a basic concept on the nature of geography. In this regard, it is suggested that the evaluation of C. Ritter, who defined geography as a science of “irdisch erfüllten Räume der Erdoberfläche”, was a diverging point of opinions in the first and second cases. Whether the concept of regional integration or chorological approach, emphasized by Humboldt and Ritter, was the main driving force of the development of geography or not? The answer to that question largely determined the perspectives of these writers on the history of geography in the 19th century.